

235. 旧栗太郡の在地瓦師に 関する基礎的考察(後編)

d: 栗太郡内における瓦師の組織化について

在銘瓦には、瓦の製作年ならびに製作者名などの他、職名が刻まれていることがある。職名には、「瓦師」および「瓦屋」の他に「瓦大工」などがあるが、図4でも明らかなように、これらの名称使用には時期的な変化の存在が認められる。

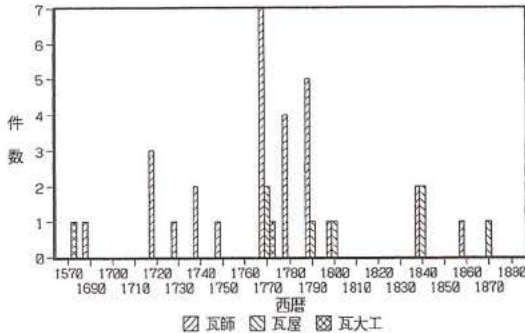


図4 職名の時期的変化

則ち、郡内では、本格的に瓦導入が始まる以前および直後では、「瓦大工」の名称の使用が確認できるものの、その後、「瓦師」の名称の使用が多くなっていく。そして、瓦の消費がピークに達する18世紀後半期に至って、新たに「瓦屋」の名称の使用が確認され、「瓦師」と共に使用されていく状況が図4から看取できる。

「瓦大工」という名称から、当初、瓦製作ならびに瓦葺きを行う者達は、屋根工事の一つとして、大工職の一環に組み込まれていたものと想像できる。この「瓦大工」が「瓦師」へ名称変化する要因としては、地方の瓦需要の増加によって在地に展開し始めたことにより、大工職とは別系統の職種として独立した結果と考えられ、ここに瓦製造の専門としての名称である「瓦師」が誕生したものと解される。また、「瓦師」とともに「瓦屋」の名称が出現した点については、当名称が確認できる18世紀後半期が、瓦師の交替ならびに個々の瓦供給先の地区割りが設定されと思われる時期に該当することから、集団的色彩の強い「瓦屋」の名称が

出現する背景には、在地「瓦師」の組織化が大きく絡んでいるように思われる。

特に、当該期は、郡内の各種商工業が仲間組織を形成した時期であり、当該期に、瓦製造に係る瓦師達の間でも一種の仲間組織の形成が図られた可能性は高く、この「仲間組織」によって郡内の瓦製造ならびに販売供給に関する取り決め等がなされたことは想像に固くない。

e: 栗太郡内の瓦製造業の経営単位ならびに画期について

一方、「瓦師」と「瓦屋」の銘が共存する場合が認められるが、この場合の「瓦屋」は、瓦製造を行う家を表現し、また、「瓦師」は、家に属し、瓦製造に携わる工人たちを指すものと思われる。この場合、「瓦屋」には、どのくらいの工人（「瓦師」）が瓦製造に従事していたのであろうか。

当該期の瓦業者に関する資料は無いため、状況は不明であるが、大正15年に編集された『栗太郡志』では、郡内の瓦業者は21戸、職工は61人が存在していたことが記されている。これを平均すれば、1戸あたりの約3名の職工が瓦製作に携わっていたことになり、この数字は、資料の検討は要するが、前記した表4の各瓦師の、一軒あたり多くても4名の瓦師名しか確認されていない状況とも符合しており、近世後期の瓦製造も大正期と変わらない小規模単位によって為されていたことが予想できる。

次に、このような小規模単位で製造されていたと思われる近世期の「瓦師」達が、どのような経営基盤によって経営を成り立たせていたのかみてみよう。

記銘瓦には、月名が刻まれたものが散見される。この月名は、瓦の製作月と供給先の社寺の屋根を飾った棟上月とを記した可能性が考えられる。記銘瓦の月名がこのいずれを示すかは、棟札との検討を必要とするが、社寺の屋根を葺くに際しては、事前より、大量の瓦を製造、用意する必要があることから、記銘瓦の月名は、事前に製造した製作月を表した可能性が高いといえるだろう。

図5は、これら記銘瓦にある月名を瓦師別に表したものであるが、これによれば、西田氏は、各月毎に製作しており、ほぼ、年間を通じて生産を行っていた可能性が指摘できるが、他の瓦師については、11月から

4月までの期間、いわば農閑期に集中していることから、農業などを営むかわらで、瓦製造も行ってた可能性が高いといえよう。よって、栗太郡内の在地瓦師達の多くは、郡内の瓦需要が増加した時期に誕生したとはいっても、副業的に瓦製作を行っていたと思われる、その経営基盤は極めて脆弱なものであったことが考えられるのである。

明治13年に編纂された『物産誌』では、近世期の瓦業者は、高野小坂村ならびに青地部田村以外の業者は姿を消してしまっている。このことから、郡内に存した近世期の瓦師の多くは、当該期までに瓦製造業を廃業してしまったことが考えられるが、このように、栗太郡の在地瓦製造については、前記のように1760～70年代に瓦業者の交替が認められ、今また、明治期を境に、在地瓦業者の変動が認められるという、都合3つの画期が存在したことが指摘できる。この画期の要因は、史料が皆無であるため不明といわざるを得ないが、3番目の画期の背景としては、18世紀後半にピークに達した以降、沈滞傾向へと向かった瓦需要や、絶えず消費市場を開拓せねばならない、あるいは、前記したように、瓦製造のみでは存続できなかった同業の経営基盤の脆弱さという経済的要因、そして、明治新政府による仲間組織解体を図った商工業種への介入といった政治的要因などを想定できるのではなかろうか。一方、大正15年の『栗太郡志』により、大正期の瓦業者数が近世期に比べ増加していることが判る。この業者数の増は、業者の経営規模の縮小化を反映するものと考えられ、第3の画期、則ち明治期以降に誕生した新興業者達は、近世期の業者と比較した場合、より地域に密着した販売単位、則ち、居住する町、村、あるいはそれら周辺地を含めた小規模な需要に対応する形態へと変化したものと解される。⁵⁾

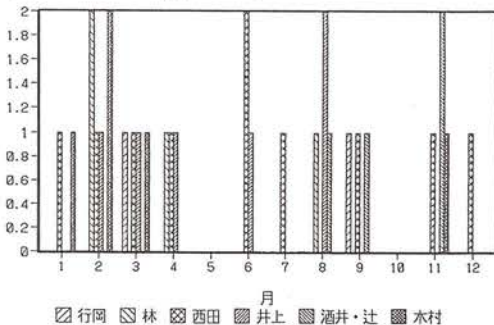


図5 瓦師別にみた記銘瓦の月別製作数

4. さいごに

以上、山寺町にある十二将神社拝殿の鬼面瓦ならびに、社寺に葺かれた記銘瓦から栗太郡の近世在地瓦師について、若干の考察を試みた。

今回の検討資料は、銘の判る鬼面瓦が主となったが、天井部に銘の多い獅子口瓦などは、葺き替えが為され、地上に降ろされている以外は、銘の有無すら不明であり、また、鬼面瓦についても、多くが屋根に載っているため、判読不明の文字や誤読も多いと考えられ、資料としての信頼性に欠けるきらいが多分にある。

また、新たな在銘瓦の判明により、新知見が得られる可能性も高いといえよう。

しかし、近世後期におけるこれら商工業に関する史料は、一部を除いて皆無に近いこと、或いは、現在、郡内の社寺の多くが、瓦の葺き替え時期に該当しており、該期の瓦が次々と損壊、亡失するという事態になっていることから、不明な点の多い郡内の近世期の在地瓦師に対する今回の考察も、多少は意味あるものといえるのではなかろうか。

また、今回の考察では、多くの在地瓦師の存在が明らかとなったが、材料ならびに燃料の調達、あるいは彼らの工房、特に瓦窯などの形態に関しては、該当資料が不明なため検討することができなかった。また、社寺などで、瓦を導入するにあたっては、それまでの屋根形態を大きく替える必要もあったと思われる、瓦のみならず、建築分野との検討も今後の重要な課題といえよう。加えて、瓦師の工房や瓦窯に関しては、発掘調査などに委ねられる点も多く、今後の資料増加を待ち、再び検討を行いたい。

最後に、今回の調査にあたっては栗東町歴史民俗博物館館長である宇野茂樹氏ならびに木川町最明寺住職の木村力氏を始めとして、旧郡内にある社寺の所有者ならびに関係者など、多くの方々より、暖かいご援助とご指導を受けることができた。紙上を借り、ここに厚くお礼を申し上げる次第である。(小宮 猛幸)

【参考文献等】

- ①『栗太郡志』巻五 1926年 滋賀県栗太郡役所
 - ②『栗東町指定有形文化財宇和宮神社拝殿修理工事報告書』大上建築研究所 1994年
 - ③『国寶石津寺本堂修理工事報告書』滋賀県国寶石津寺建造物修理出張所 1938年
 - ④『草津市史』第二巻 草津市 1984年
 - ⑤「近江栗太郡村誌」の大路井村の条には、村民自用に供するための瓦製造が行われていたことが記されている。「近江栗太郡村誌」上 『草津市史史料集1』草津市 1990年
- その他 「和瓦のはなし」 『物語 ものの建築史』山田幸一監修、藤原勉・渡辺宏著
『最明寺 その歴史と信仰』 最明寺

| 地区名 | 町名 | No. | 寺社名 | 年代 | 形態 | 銘 |
|------------|-----|------|-------------|---|---|--|
| 山田 | 木川 | 9 | 最明寺 | 安永七年(1778) | 降棟鬼瓦 | 【右】安永七年 戌□霜月吉日 【左】瓦師青地村 酒井善藏 |
| | | | | 天保十一年(1840) | 降棟鬼瓦(門) | 瓦十江州山田村惣吉 天保十一年庚申 栗太下田上村 片岡伝四郎寄進 |
| | | | | 明治十二年(1879) | 降棟獅子口瓦(鐘樓) | (天) 明治拾二年 □三月 南郷 竹花氏 作人 松尾郁治 |
| | 北山田 | 10 | 若宮神社 | 寛延二年(1861) | 大棟鬼瓦(門) | 【右】万延二年 酉二月吉日 【左】瓦師松本村 井上七右エ門 |
| | | | | | 降棟鬼瓦(脇堂) | 【右】瓦師 井上七右エ門 |
| 草津 | 草津 | 11 | 養専寺 | 明和八年(1771) | 降棟鬼瓦 | 【右】明和八卯歳栗太郡 四月吉日 金勝村 瓦屋 近信 【左】仲村瓦屋井上 □ 吉右□□ |
| | | | | 宝曆(1751~1764) | 大棟鬼瓦(門) | 【右】瓦師江州金勝中村 井上吉□□□ 【左】宝曆□年 八月吉日 |
| | | 12 | 正定寺 | | 大棟鬼瓦 | 【右】□□ 吉日 地藏カ 【左】栗太郡六□□ 瓦師林太右エ門□□ |
| | | 13 | 立木神社 | 文政十年(1827) | 大棟節鬼瓦 降棟節鬼瓦 | 【右】文政十年 □□月 松本カ 【左】大津□□ 奉納カ 清水左太□□ |
| | | 14 | 草津宿本陣 | 安永八年(1779) | 降棟節鬼瓦 | 安永八年亥七月十日□人藤原義勝(花押) 小平井村瓦師西田弥左エ門 |
| 享和二年(1802) | | | | 享和二壬戌歳 小平井瓦や 享和二壬戌九月十一日 瓦師小平井村西田弥左エ門 市カ 小平井 西田□享和貳年壬戌十二月 | | |
| 老上 | 矢橋 | 15 | 石津寺 | 天正六年(1578) | 降棟鬼瓦 | 【右】瓦大工 栗田口ノ住人與兵衛 天正六年三月 |
| | | | | 元禄十二年(1699) | 大棟鬼瓦 | 【右】己 元禄十二年 卯 十月 吉日 【左】大三郡大津松本村ノ住人 藤原朝臣 村上七左衛門佐 大津松本京町 瓦師 村上七左衛門 |
| | 16 | 鞭碓神社 | 明治十年(1877) | 降棟獅子口瓦 | (天) 青地瓦屋 辻伊三郎 明治十年 丑十日 | |
| | 野路 | 17 | 浄泉寺 | | 鰯瓦 | 【右】江列栗太郡金勝中村 瓦師井上吉右エ門 |
| 18 | | 新宮神社 | 明治十三年(1880) | 大棟鰯瓦 | 【右】明治十三年吉日 奉カ □善□□□ 【左】明治十三年 九月 あおじ 瓦善藏 | |
| 志津 | 山寺 | 19 | 祥光寺 | 元文四年(1739) | 降棟鬼瓦 | 【右】元文四年 未ノ四月吉日 【左】江州栗太郡 六地藏邑 瓦師林太右エ門 |
| | 青地 | 20 | 小槻神社 | 安永七年(1778) | 降棟鬼瓦 | 【右】安永七年 霜月吉日 【左】瓦師青地村 酒井□□ |

| 地区名 | 町名 | No. | 寺社名 | 年代 | 形態 | 銘 |
|-----|------------|--------|--|------------|--|---|
| 志津 | 青地 | 20 | 小槻神社 | 安永七年(1778) | 大棟鬼瓦(手洗屋) | 【横】志津村 字岡元 瓦屋□ □追分 作人 高岡廣 |
| 治田 | 川辺 | 21 | 善性寺 | 寛保三年(1743) | 降棟鬼瓦 | 【右】川辺善性寺瓦師太兵衛 【左】寛保□□春日 |
| | | 小柿 | 22 | 光門寺 | | 降棟鬼瓦 |
| | 安養寺 | 23 | 安養寺 | | 降棟飾鬼瓦 | 【右】卯八月吉日 瓦シ三□□□作カ 【左】川辺村瓦屋 川辺太七良 |
| | | 24 | 東方山安養寺 | 享保十年(1725) | 大棟鬼瓦(鐘樓) | 【右】六地藏村 瓦師林太右衛門 【左】享保十年 八月日 |
| | | | | 元禄八年(1695) | 大棟鬼瓦 | 【右】元禄乙亥三月吉日 【左】□□国愛宕郡菅谷住□□ □村彦左衛門尉藤原吉次 |
| | | | | 降棟鬼瓦 | 【右】元禄八年 □三月日 【左】□□国愛宕郡菅谷住□□ □村彦左衛門尉藤原吉次 | |
| | 享保六年(1721) | 大棟鬼瓦 | 【右】六地藏村 瓦師林太右エ門 【左】□享保六年 □月吉日 | | | |
| | 降棟鬼瓦 | 【右】安養寺 | | | | |
| | 目川 | 25 | 養専寺 | 寛政七年(1795) | 大棟鬼瓦(鐘樓) | 【右】寛政七年 卯八月吉日 【右】江列栗太郡 金勝中村 瓦屋吉右エ門 |
| | | | | | 大棟鬼瓦(本堂) | 【右】□瓦大工□本 六地藏村林太右エ門 作カ 【右】□人 京大佛佳大□□ 藤原義徳 金又は全 【左】□瓦大工□本 六地藏村林太右エ門 |
| 高野 | 六地藏 | 26 | 高念寺 | 明和八年(1771) | 降棟鬼瓦 | 【右】明和八歳 卯二月吉日 瓦屋小坂村木村弥太郎 【左】瓦師木村弥助(花押) 【右】明和八歳 卯二月吉日 瓦大工小坂邑弥助(花押) |
| | 小野 | 27 | 大角家薬師堂 | 宝暦六年(1756) | 大棟鬼瓦 | 【右】宝暦六歳 丙子天 □□□□ 【左】江州栗太郡六地藏邑 瓦師林太右エ門□□□ |
| 大宝 | 蜂屋 | 28 | 宇和宮神社 | 寛保四年(1744) | 大棟鬼瓦 | 【右】寛保四歳 子ノ二月吉日 【左】江列栗太郡高野 六地藏村 瓦師林与右門 【右】寛保四歳 子ノ二月日 【左】江州栗太郡 六地藏村 瓦師林太右衛門 |
| | | | | | | 【右】寛政六□□ 寅六月吉日 【中】正薬寺棟 御棟瓦 【左】瓦師小平井村住人 西田吉右衛門 【右】寛政六年 寅卯月吉日 【左】小平井村 瓦師西田弥左衛門(花押) |
| | 霊仙寺 | 29 | 正薬寺 | 寛政六年(1794) | 大棟獅子口瓦 | 【右】寛政六□□ 寅六月吉日 【中】正薬寺棟 御棟瓦 【左】瓦師小平井村住人 西田吉右衛門 【右】寛政六年 寅卯月吉日 【左】小平井村 瓦師西田弥左衛門(花押) |

| 地区名 | 町名 | No | 寺社名 | 年代 | 形態 | 銘 |
|-------------|-----|-------|-------------|-------------|--|--|
| 大宝 | 總 | 30 | 西琳寺 | 元文三年 (1738) | 大棟鬼瓦 (門) | 【右】元文三年 午九月 |
| | | | | | 降棟鬼瓦 (樓) | 【右】奉納瓦師八部 |
| 金勝 | 御園 | 31 | 善勝寺 | 天明七年 (1787) | 大棟鬼瓦 (門) | 【右】天明七年丁未年 二月吉日 金勝中村瓦師吉右エ門 |
| | | | | | 大棟鬼瓦 (鐘樓) | 吉右エ門カ 【右】瓦師井上□□□□ □三□ 丁カ □未年 |
| | | | | 寛政七年 (1795) | 大棟鬼瓦 (本堂) | 【右】寛政七年乙卯年 三月吉日 【左】江列栗太郎番勝中村住人 瓦師井上吉右エ門 |
| | 荒張 | 32 | 廣徳寺 | | 降棟鬼瓦 (鐘樓) | 【左】江列栗太郎金勝中村住人 瓦師井上吉右エ門 |
| | 東坂 | 33 | 阿弥陀寺 | | 大棟鬼瓦 (鐘樓) | 【左】江列栗太郎金勝中村 □□瓦師井上吉右エ門 |
| | 上砥山 | 34 | 浄西寺 | 寛政六年 (1794) | 大降鬼瓦 (鐘樓) | 【右】江列栗太郎金勝中村 瓦師吉右エ門 【左】寛政六年 寅六月吉日 |
| 享保六年 (1721) | | | | 大棟鬼瓦 (脇堂) | 【右】享保六歲 二月吉日 【左】六地藏村 瓦師林□□□□ 【左】□□□□ 瓦師吉□□□ | |
| 守山 | 二町 | 35 | 教願寺 | 安永二年 (1773) | 降棟鬼瓦 | 【右】總村瓦師 ----- 【右】岡瓦師清八 ----- 【右】瓦師利八郎 同行清八郎 【左】總村瓦師 利右門佐 ----- 【左】安永二年三月□ 利右門佐 |
| | | | | | | 勝部 |
| | 守山 | 37 | 大光寺 | 寛政七年 (1795) | 大棟鬼瓦 (門) | 【右】寛政七乙卯 三月吉日 【左】江列栗太郎高野庄 □小坂村住木村弥七郎 (花押) ----- 【右】□瓦小坂村木邑弥七郎 (花押) 【左】寛政七卯三月吉日 |
| | | | | 寛政四年 (1792) | 大棟鬼瓦 (鐘樓) | 【右】寛政四年壬子 江列栗太郎小坂邑弥七郎 (花押) ----- 【右】江列栗太郎 瓦師小坂邑弥七郎 (花押) 【左】寛政四□ 壬子閏二月吉日 |
| 古高 | 38 | 大將軍神社 | 安永五年 (1776) | 大棟鬼瓦 (鐘樓) | 【左】總村瓦シ行岡利右衛門 ----- 【右】安永五年 □閏正月吉日 【左】江□總村住人 □□ | |